コミキャン「このゆびとまれ（自立訓練・生活訓練）」

第10回 卒業式

～ これからもみんな元気で がんばってください ～

祝卒業

2024（令和６）年 3月29日



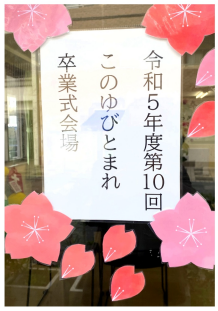
卒業生：
貝塚朱音・津野田学・橋本佳吾・鳩山瑞季・吉峯ことは
計５名（敬称略）

３月29日（金）「このゆびとまれ」第10回（令和５年度）の卒業式が行われました。

卒業対象は支援学校からの５名のメンバーで、そのうち３名が引き続き、コミュニティキャンパスの各施設で活動し、２名の方は他に進路をとることになります。

式では、理事長、管理者の祝辞のほか、みんなが協力して作り上げたオリジナルの“２年間の思い出”映像の上映や“世界にひとつだけの花”の合唱の披露、また、メンバーさんそれぞれが作り上げた、アート作品の授与のほか、１年生からの「お祝いの言葉」。卒業生からのメッセージ交換には、涙するエピソードやシーンがいくつもありました。



















理事長祝辞（抜粋）

▼本日は、ご卒業おめでとうございます。
私が時々、「この指とまれに」に立ち寄った時に、みんなが「理事長さん」とか「牧野さん」とか言って笑顔で出迎えてくれます。私はその時、本当に幸せな気分になります。

素直な優しい心、笑顔はそこから生まれます。悩んだり苦しんだりした時でも笑顔は人の心を和ませてくれます。いつまでもその笑顔を忘れないで下さいね。

コミキャンで去年から始めているライブハウス「ウノアオトロ」は、スペイン語で「チガイを認め合う」という意味です。みんなそれぞれの個性があって、やりたいこともそれぞれ違って一人ひとりチガイがあります。そのチガイを認め合えれば、ケンカなんか起きません。戦争も起きないとおもいます。
ライブハウスでは「生きる」というコミキャンのテーマソングを音楽プロデューサーの秋田さんが歌っています。その歌詞を皆さんに贈ります。

① **踏まれても踏まれても生き抜いてやる！ あの雑草のように力強くたくましく ！**
② **倒れそうになった時には自分の周りをほら　暖かい暖かいその手がある！**
③ **あの雑草のように力強くたくましく、踏まれても踏まれても生き抜いてやる！**

♪ 明るく元気になる歌です。
みんな一緒に参加して楽しんでくださいね。
（社会福祉法人コミュニティキャンパス　理事長 牧野篤子）

コミキャン新聞

第148号

大阪市東淀川区
上新庄2-1-40
TEL：06-4862-6057
http://www.communitycampus.jp/

コミキャン編集委員会
発行者
社会福祉法人
コミュニティキャンパス

コミキャン新聞に掲載された情報（写真等）の著作権・肖像権は全て当該メンバーさんの保護者の方々及び社会福祉法人コミュニティキャンパスに帰属し、無断でこれを複製、利用することを固く禁じます。

令和６年度 社会福祉法人コミュニティキャンパス 事業計画

▼【前年度までの振り返り】

令和5年度は、失われた30年という言葉に脅かされた1年となった。コミュニティキャンパスが出来る1998年の5年前からが失われた30年の始まりであるからだ。

＊1993年　失われた30年の始まり

＊1998年　メンバー5人、スタッフ3人で、共同作業所「コミュニティキャンパス」開所

＊2003年　社会福祉法人が基本金1000万で設立可能となり、「社会福祉法人コミュニティキャンパス」となる。グループホーム（知的男性・一休庵）（精神女性・胡蝶庵）、作業所はポコポコ亭含め5カ所を展開、居宅介護サービスのコミキャンヘルプサービスも開始した。

＊2013年　コミキャン就労総合センター、生活訓練「このゆびとまれ」、放課後デイサービス「ポピー」など、2003年からの10年間で小規模社会福祉法人の補助金で、今の原型が出来上がる。

ここまでで、社会福祉法人としては10年目であり、「コミュニティキャンパスの奇跡の10年」と呼んでもいいだろう。失われた30年としては20年目となり、小さな小さなマンションの一室から、補助金を使うことが出来たお陰で、今の原型が出来たからだ。　（社会福祉法人コミュニティキャンパス 理事長 牧野篤子）

▼【総括として】

試行錯誤を恐れない。やってみることが大切。結果は後からついてくる。地域で生きる仲間・スタッフの共同体としてのコミキャン。障がい者や生きにくさを抱えた仲間が地域で孤立して社会と向き合うと間違いなく崩れてしまう。共に生き、共に学べる相互扶助の空間と文化を造り上げよう。

コミキャンという文化風土の中で、人としての優しさが私たちの資源と思う。これからも時代、社会は大きく変わっていく。しかし、私たちは今ここ底辺（大地）に根を張って生きている。

何があっても、コミキャンは、私たちは生き残ることを目指している。

100年後の子供たちの為にも生き残りたい。 今生きていることに感謝・・・

（社会福祉法人コミュニティキャンパス 副理事長 高岡善弘）

茨木市のイオン太田店で開催された「ちかつアートフェスタ」に 西河原・橋の内コミキャンが参加









2月3日、4日の土日、茨木市のイオン太田店にて「ちかつアートフェスタ」が開催され、コミキャン西河原・橋の内のメンバー皆さんの絵画展示や橋の内の製菓の販売を行いました。（今回も、市内3カ所の地域活動センターさんが中心となって様々なブースをプロデュースしてくださいました）

また、コミュニティキャンパスとしても、2日間にわたり、多くのご家族様やグループホームの職員様、計画相談支援員様が足を運んでくださり、会場を盛り上げてくださいました。写真に写っていない方もたくさん来られています。皆様、どうもありがとうございました！

（西河原コミキャン・藤本さん談）





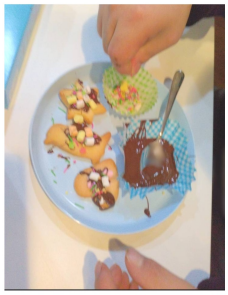


就労総合センターのバレンタインデー！



２月５日（月）に、ウノアオトロの多目的スペースでクッキーデコレーション体験会を開催しました。

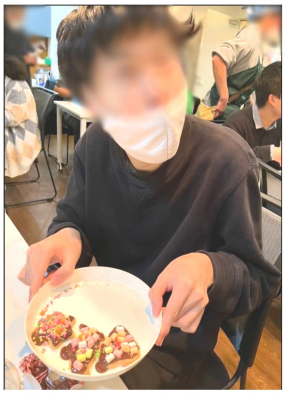
参加者は「このゆびとまれ」他30名のみなさん。今回はクッキーにチョコレートをデコレーションしてもらいました。豪快にチョコレートをかけたり、細かく塗ったり。それぞれの個性が輝いていました。



早く飾り付けを終えた人は今か今かとソワソワ…。全員揃っていただきますをすると、すぐに手を付ける人、トッピングを増やす人、みんな笑顔で食べていました。



２月９日（金）は就労移行のみんなでバレンタイン用のクッキーを配達。人に渡したり説明をするのは緊張のためかぎこちなくなりつつも、しっかり最後まで取り組んでいました。嬉しそうにお礼を言われ、緊張もほぐれた様子で顔がほころんでいました。



担当していた職員からは「このゆびの人達が喜んでくれて良かった」「普段とは違った雰囲気を感じ、勉強になった」「このゆびのスタッフが手伝ってくれたので、怪我などもなく無事終わった」等の感想をもらいました。



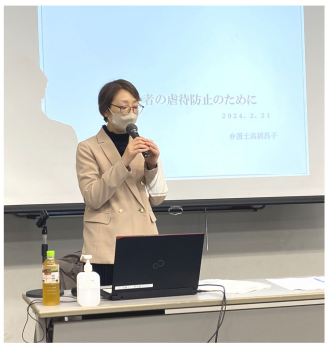
初めての試みということもあり、何をどうすればいいのか手探りの状態でしたが『楽しい』といってもらえて良かったです。これからも、みんなが笑顔で一人ひとりがより一層楽しく体験できるように取り組んで行きます。

（コミキャン就労総合センター・濱さん談）

虐待防止研修（管理職52名を集めて開講）



《概 要》
日 時：2024年 2月21日（水）
会 場：吹田市内本町コミュニティーセンター 3F会議室
参 加：管理職員ほか 52名 、社会福祉士実習生 1名
講義内容：障がい者虐待防止および身体拘束適正化の基礎研修
講 師：弁護士 高橋昌子 先生（春の森法律事務所）



令和６年２月21日（水）、弁護士の高橋昌子先生をお招きして、令和５年度最後の職員研修を実施。テーマは「障がい者の虐待防止のために」と題して、全国の虐待状況の報告やその要因と障がい者虐待防止法の基本理念などご講義いただきました。



また今回「身体拘束適正化」についても触れられ、そのなかで「サービス改善課題点検項目」を手元に、各グループでディスカッションを行い、施設自己点検シートをチェックしました。これにより現状の職場での課題がより明確になり、虐待のない適切な支援サービスに向けての取り組みや、日々の支援の質を高める知識がより深まりました。



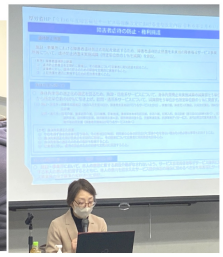
コミュニティキャンパスでは職員を一堂に集め、このように定期的な研修を実施し、サービス向上とともに、利用者の人権を守る取り組みを進めています。

（コミキャン研修委員会・柳谷さん談）









日 時：2024年 3月16日（土）
出 演：八木たかし&青山武彦&秋田克英

《出演者プロフィール》
★八木たかし；1950年生。岡山県倉敷市出身。大阪で10年、働きながら唄い始める中で「関西フォーク」と出逢う。集大成としてLPレコード「風を伝えて」を製作し、倉敷を中心に唄い始める。県内外からのコンサート出演依頼が年間100本を超える。
★青山武彦：1951年生。岐阜市出身。1970年から京都フォーク集団「ポロ」入団。京都フォークソング連絡会議所属。一時、歌活動を休止していたが、還暦コンサート開催を機に歌活動再開。現在、岐阜市内で畑や田んぼに囲まれた田舎暮らし。
★秋田克英：1949年生。大阪市出身。14歳から我流でギターを始める。20歳で学生運動の中、反戦フォークを歌う。その後、障害児施設で働きながら音楽活動も並行して展開。現在、コミキャンのライブハウス「ウノアオトロ」の総合プロデューサーでもある。

コミキャンのライブハウス
ウノ・ア・オトロ
スペイン語で「違いを認め合う」の意味


←八木たかしさん（中）

今回のライブは、関西フォークを源流とする３人のベテランシンガーの共演。

日本でも１９６０年代半ばにフォーク・ミュージックの人気が高まっていたが、メッセージ性と実験精神に富んだ音楽を展開したのが「関西フォーク」と呼ばれるバンドやアーティストだった。

東山の円山公園音楽堂をはじめ京都市内でさまざまなフォーク・コンサートが開催され、その熱は東京にも伝わり、おりからの学生運動や反戦運動と結びついていった。60年代から70年代にかけて反戦、平和を求めるメッセージや、新しい表現を追求する関西フォークが、多くの若者に共感をもって受け入れられたのである。


→青山武彦さん（中）



そんな関西フォークの「生ける伝説」たちがウノアオトロに集まってくれた。


←秋田克英さん（中）

ライブは、３人それぞれの持ち味で会場一体となり（コミキャンメンバーさんの飛び入りも！）熱気と歓声で大盛り上がり。

最後は、コミキャンのテーマソングともなった「生きる」を秋田さん中心に会場の全員で大合唱、クライマックスをむかえた。



出演者のみなさんにも、興奮さめやらぬ終演直後、ひとこと感想をお聞きしました。

★八木たかしさん
「気持ち良かった！」

★青山武彦さん
「誰かを励まし、明日を生きる力になったら！」



★秋田克英さん
「メンバー仲間、地域の皆さんの笑顔が最高でした。生き辛い社会ですが、音楽の力を信じたい・・・」

ステージ・聴衆一体となった熱気に、あの場に居たみんなが酔いしれた。

出演者のみなさん、すばらしい音楽を、ありがとうございました。